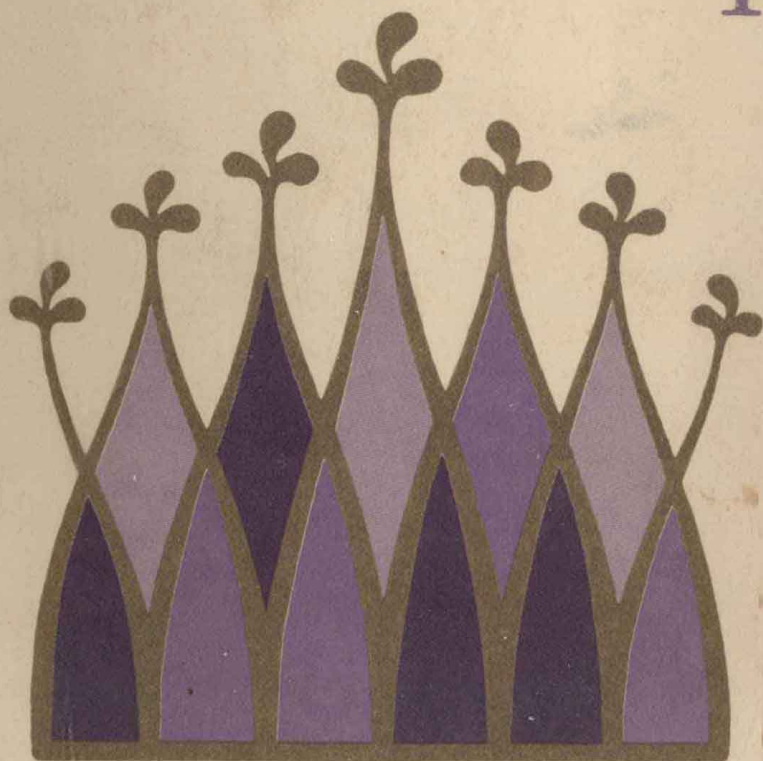


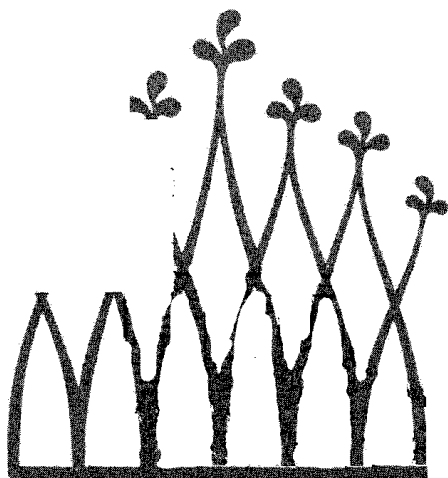
ロシアの 民話

ヴィクトル・ガツァーク編／渡辺節子訳 II



ロシアの民話 II

ヴィクトル・ガツァーク編／渡辺節子訳



■渡辺 節子■

1949年 東京に生まれる

1970年 アジア・アフリカ語学院卒業

「民話研究会」会員

著書に『ロシアフォークロア』①～④

訳書に『エスキモーの民話』などがある



©1978

ロシアの民話 II

定価 2,000円

1979年1月20日 第1版第1刷発行

1980年7月20日 第2版第1刷発行

編者 ヴィクトル・ガツァーク

訳者 渡辺 節子

発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町3-3

〒101 電話 291-7901

振替口座 東京5-35824

落丁本・乱丁本はお
取り替えいたします

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本

0098-005019-2273

■
目

次
—
ロシアの民話②

外コーカサス地方 9

ガムバル 11

黄金のりんご 29

職人アブドゥーラ 33

芸を仕込まれた猫 41

羊飼いの十番目の息子 44

お祈りのお代、ひつじ三十頭 54

太陽の娘 56

ある皇帝とその息子の話 77

三人兄弟と怪物アグルシャプの物語 79

中央アジアとカザフスタン地方 85

アク・バミク 87

マメッド・ジャン 109

狩人とその友人たち 137

学問ではなくて、分別の問題 147

芸は身を助ける 149

ろばの賢者 161

汗に奉仕させた娘の話 163

ハエの王さま 165

ベクジャルと魔法の鳥ズィムイリク 168

知恵と幸福と富 180

アラマンとジョラマン 185

どうしてもらくだは水を飲むとき、あたりを見まわすのか 192

シベリア地方 195

マチエンカト 197

犬 205

暖かいお天気 209

アル・モンドウル 212

灰色の雀 217

星 225

狩人イルビ・シルビ 226

銀色の本 232

ブンバアダイ爺さん 238

ウルズン汗の悪知恵 243

確かな狙い 246

ガルダンとバイル 255

極東地方 261

黄金の太陽・優しき蝶・美しきユケイデンのはなし 263

メルゲンとその仲間たち 281

いかにして熊は鹿飼いになりそこねたか 289

ほら吹き 293

くまとしまりす 295

欲張りのえぞやまどり 297

火打ち石 300

帰ってきた太陽 307

きつねとからす 309

二人の力持ちと老人 315

みなし児とお月様 317

年寄りのトカはいかにエヴェンキ人を仲直りさせたか 319

解説——渡辺節子 325

ロシアの民話Ⅱ

裝幀・本
田
進

外
コ
ー
カ
サ
ス
地
方



ガムパール (アルメニア)

むかしむかし、一人の女がいた。女にはガムパールという名の一人息子があつた。二人の暮らしはとても貧しかった。毎日欠かさず、ガムパールは、縄を持って、野原に出かけ、あざみやかもじ草を集めては、市場に持って行って二束三文で売り払い、その稼ぎでやっとパンをかうのだつた。

あるとき、ガムパールは、皇帝の宮殿前広場に、かもじ草を売りにやって来た。ガムパールのぼろぼろの服を窓から見ていた皇帝の娘が父親に言った。

「哀れな若者だこと。あの人に奥さまがいらしたら、あんなぼろを着ていることもなかったでしょうに」

皇帝は腹を立てたが、何も言わず、おもだった大臣たちを呼び集めた。

「さあ行って、かもじ草売りをわしの許へ呼んでまいるのだ」

呼び立てられたガムパールは、ひどく恐れていた。皇帝が自分などにいったい何の用があるの



か？ ガムパールは宮殿の中に入り、皇帝にぺこりと頭を下げ、すみの方で小さくなっていた。

「これ、若者よ」

皇帝は言った。

「わしがおまえをここに呼んだのは、わしの娘をおまえに嫁がせるためだ。妻にするか？」

ガムパールはびっくり仰天、立ちすくんだ。聞き違えではないだろうか？

「いいですか、お若い人」

そのとき皇帝の娘が口をはさんだ。

「あなたはなぜ途方に暮れたような顔をしているのです？ わたくしの両親があなたに自分の娘を嫁にやろうと言うのです。いったい何を恐れているのです？ さあ、わたくしに結婚を申し込むのです」

七日七晩にわたって婚礼がとり行なわれ、ガムパールは皇帝の娘を連れて我が家へと帰って来た。

家に入るや、ガムパールは母親に言った。

「母さん、皇帝さまがおれに自分の娘を嫁にくれたんだ。ほら、これがおまえさまの嫁ごだ。何か下に敷いて、腰かけさせてやってくれや」

家は大変貧しかった。壁は乾糞の煙とよごれで黒ずみ、敷物など一片でさえどこにも見えはし

ない。山羊の皮が二枚、放り出されていたが、それも一面穴だらけだった。それというの、ガムバールの母親がそれで着物をつくらうていたからだ。穴だらけの毛皮の一枚を、母親は、皇帝の娘をすわらせようと下に敷いた。

皇帝の娘は腰を下ろし、まわりを見回して、神に感謝した。そして、「きっとこれがわたくしの運命なんだわ」とつぶやいた。

皇帝の娘は、自分のドレスを小さく切りきざんで、ガムバールの服をつくろい、よごれを落し、きちんと整えた。翌日、ガムバールは再び野原に出かけ、かもじ草とあざみを集め、再び宮殿前広場に売りに行った。皇帝が窓からのぞくと、実際、今日のガムバールの服はそれほどぼろぼろではないではないか。

夕方ガムバールが家に戻ると、妻は棘だらけの夫の手を見て、哀れで胸が締めつけられる思いだった。

「いいですか、これでは生活と言えません。一日じゅうごろごろいう石とさらさら流れる砂の中で疲れ果て、へびのように這いずり回って、カエルの沼から水を飲んでいる。それでもなにもかもうまくいかずに、稼ぎといったら、銅貨が数枚だけ……別の仕事を探した方がいいのではないですか？ 人の所に奉公に出るか、日雇い人夫にでもなったら、多分、もっといいくらいができるんじゃないでしょうか」

「わかったよ、おまえ、言うとおりにしてみるよ」

夜が明けるとすぐ、ガムボールは起きて市場へ出かけて行った。「日雇い人夫に雇われるか、さもなければ、一カ月か二カ月、奉公に出よう」と考えていた。

ガムボールは市場をさんさん歩き回って、こちらの人、あちらの人へと頼んで回った。そのとき突然、ひとりの商人がガムボールに近づいて来て尋ねた。

「おい、お若いの、わしの所に奉公に来ないか？」

「どうして行かないことがあるものか」

ガムボールは答えた。

「そのためにおれはここへ来たんだから。ところでだんなは、一年にいくら、おれに払ってくれるかね？」

「正直な仕事の売り上げからは一メーラ（穀物計量単位、約一ブード）を、不正直な仕事の売り上げからは二メーラというところだ」

「わかったよ、かみさんに聞いてくるよ」

ガムボールはそう答えて、家に戻ると、妻に話して聞かせた。

「ひとりの商人がおれを雇いたがって、正直な仕事の売り上げからは一メーラ、不正直な仕事の売り上げからは二メーラ払ってくれるって約束した。どうしたらいいだろう、おれにはわからない